



廊下のパンツ

夢野市太郎

午前三時。夜明け前にはまだかなり時間がある。タブレットの画面から目をそらし大きくあくびをする。午後十一時頃からネットに入ったので四時間ほどインターネットの上を徘徊していたことになる。自分のブログへの「ぽち・キラ」や、「いいね！」へのお返しだけでも一時間以上はかかるし、コメントへの返事をしたりつぶやいていたら二～三時間はすぐ経ってしまう。部屋のカレンダーに目をやると文字がぼやけて見える。いくら日曜日で仕事が休みだからといっても、今日はこれくらいにしておくか。そう思うと急に腹が減る。休日の前の日はいつも徹夜でネットを徘徊してしまう。無駄な時間をつぶしているとわかっているのだが、どうにも止まらないといった感じ。たまには早く寝ようと前日にがんがん焼酎を飲んで寝ても、夜中に目が覚め、やっぱりタブレットでネットをうろついている。そして明け方になって腹が減り、近くのコンビニでサンドイッチかおにぎりを買って食べている。

いつからこんなにネットにのめり込む生活をするようになったのだろう。気がついたらこうなっていた。それまでは、仕事から帰ったらコンビニで買った弁当を食べ缶ビールを飲み、タブレットのメールをチェックしたらテレビのニュースを見て風呂に入って寝てという生活だった。そこにブログが入ってきた。初めは週に一度ほど職場の愚痴や身のまわりの不愉快なことをブログに書き込んでいたのだが、自分の書き込みに「いいね！」や「ぽちっと」が入ると、突然嬉しくなると、相手にお返しをしていたら、それがどんどん増えてきた。そのうちほとんどの人が相手の書き込みの内容などまるで関係無しに「ぽち、キラ」などをしていることに気づいたが、もうその時はそんなことなどどうでもよくなっていた。とにかく自分への「ぽち・キラ」には必ずお返しをしないとどうにも落ち着かなくなっていた。そして自分も相手のつぶやきやブログの内容など全然見ないで「いいね！」をクリックしている。完全に惰性でやっている。無意味なことには関わらないという生活信条があったのに、どうにも止まらなくなっていた。そんな時に新店開発のために本社からこの地方都市に二ヶ月の予定で派遣されてきて、そうした生活ともおさらばできるかと思ったが、このビジネスホテルでも相変わらずネット生活は止められない。職場と部屋とコンビニ以外はネットで生活しているような気分だ。ネットにのめり込む度合いが大きくなるほどに、仕事や身の回りのことに無関心になっていくような気がする。そんな状態にやばいと思う気持ちもあるが、それでいいのだという気持ちもあって止められない。これをネット中毒というのだろうが、それがどうしたと居直ってしまう。どうせまともに一生懸命働いても、マジメな社会人としての生活をやっても、誰も評価してくれないんだからというやるせない気持ちがある。自分は職場でも社会でもきちんと評価されていないという気持ちは社会人になって日に日に強くなっている。だったらネットではちゃんと自分を評価されているのかといえば、所詮バーチャルの世界。相手の顔を見ることがないからこそ適当に相づちを打てるし、優しい言葉をかけることもできる。利害がからまないから相談にも気軽に丁寧に答えられる。むしろ、競争するかのようによく多くの人が親切に自分の知識を披露しあう。これが職場だとうはいかない。つい「なにやってんだよー。こんなこともわからないのか、何年この仕事やってんだ」となる。そんなうわべだけの付き合いでしかない相手に本当の自分をさらけ出す気もない。さらけ出しても、風俗の店や破れた革ジャンを高額で売するような怪しげなサイトからのお誘いがくるだけだ。ヘタし

たら何人もの男から多額の金をむしり取り、次々死地に追いやる恐ろしい女に引っかかることになる。それがわかっているのにネット徘徊を止められない。まるで薬物中毒みたいなものだ。今ならこんな生活から抜け出せるはずだから一日ぐらいは部屋のタブレットのスイッチを入れないで早く寝ようと思いながら、やっぱり今日も深夜までネット。馬鹿は死ななきゃ治らないんだろうなと自分を罵って溜息をつきやっとなのタブレットの前から立ち上がり扉を開け部屋の外に出る。外は熱帯夜の蒸し暑い空気が幾分和らいだようで少し気分が好くなる。

ビジネスホテルの廊下を歩いて行くと、廊下の真ん中に布のような物が落ちている。これが廊下の端に落ちていたらチラリと見ただけで通り過ぎるのだが、あまりにど真ん中に落ちているので思わず腰をかがめてその布をよく見た。地の色が黄色で、かわいい茶色のクマの顔のようなキャラクターが全体にたくさんプリントしてある。ハンカチのようにも見えるが、全体にこんもりとした立体感がある。うむっ、ひょっとしたらパンツかも！。突然血圧が急上昇する。心臓がバクバク音を立て始める。な、なんなんだこれは。思わず顔をその布から十五センチほどに近づけ観察する。こんもり盛り上がっているその布はどうやらパンツに間違いのないようだ。子どものパンツにしてはかなりサイズが大きい。サイズを確認するとすぐに男の物か女の物か気になる。じっと目をこらしてみるとどうも女性用のパンツのように見える。女物で子供用ではない。とすればこの熊のようなキャラパンを穿く女の年齢は。むによによによによ～～～女子高生か！。額からは汗が間欠泉のように吹き出す。さらに顔をその布から五センチぐらいまで近づける。まるで買ったばかりのようにほとんど皺がない。洗濯した感じがまったくない。しかし値札は付いていない。ということはすでに値札を外していたということか。つまり今夜使用することを目的としてこのパンツ、いやパンティーをこのアパートまで持ち込んだということなのか。先ほどまで半分居眠っていた頭がフル回転する。このパンティーの持ち主は誰なんだ。

このホテルはいつ建てられたかもわからないような古い建物で、私の泊まっている階は薄暗い廊下を挟んで両側に六部屋ずつ並んでいる。部屋の中もあまりきれいとは言えないがとにかく安いので選んだ。街の中心からあまり離れていないこともあって、私のように安月給で残業が当たり前のようなサラリーマンにとって、安くて交通の便がよくてバス・トイレ付きであるということはもの凄くありがたい。カプセルホテルでは一週間も耐えられない。おまけにホテルのすぐ側にコインランドリーとコンビニがあるのが助かる。帰宅途中で居酒屋に寄らなくても、コンビニで酒もご飯も手に入る。作業服や下着の洗濯の心配もいらない。それになにより助かるのは人の声や物音が全くしないことだ。ビジネスホテルでは、夜中に隣室からTVの音やシャワーやトイレの水を流す大きな音がしてムカツとすることがよくある。しかしこのホテルに泊まって3週間ほどなるのにそういう音を聞くことがない。扉の開け閉めする音さえ聞いたことがない。私が朝早く出て夜遅く帰るということで他人の音を聞かないのかもしれないが、どういうことであれ静かな環境は他人の生活の音に過敏な私にとって非常に好ましいことだ。それに今までこのホテルの中で他人と出会うことは全くなかった。ある意味で私はこのホテルを独り占めしているような気分だった。それなのに何故突然こんなところに女物のパンツが落ちているんだ。一番考えられることはどこかの部屋の男がティーンエイジャーを自称するホテル嬢を自分の部屋に連れ込ん

だということなのだろう。それならありえる。男は出張に出るとすぐにスケベな欲望にとらわれる。女房の肌には指一本触れる気も起こらなくても、見知らぬ風俗嬢には欲情するものだ。電話で呼び出された女は男の部屋に入る前にコンドームと着替えのパンティーを安っぽいバッグの中から出して確認した。その時誤って落としてしまった。ちくしょー、今頃は男の部屋のバスの中で時間を気にしながらシャワーを浴びているんだ。

妄想で頭の中を一杯にしていたら腹がたってきたので、パンティーを思いっきり蹴飛ばしてやろうと思って脚を大きく振り上げた時にふと思いついた。このパンティーのクマのようなキャラの並び方がどこかで見たことがあるような気がした。そうだ、まるで草間彌生の水玉模様の絵のようだ。とすれば、このパンティーはひょっとしてルイ・ヴィトンのものなのか。ルイ・ヴィトンといえば超高級品というイメージしかない貧乏性の俺は、無意識のうちにそのパンティーを手にとろうとした瞬間「ぎえー」という妖怪の叫び声のような声を聞いて、その叫び声のした前方をしゃがみ込んだまま見上げると、上半身はクマの全身のイラストをプリントをしたTシャツを着て、下半身はスッポンポンの女の子が、股間に両手を当てたまま私の方に向かって廊下をぴょんぴょん飛び跳ねて来るではないか。あまりにも突然で不可解なことにすっかり頭の中が真っ白になり、思わず直立不動になってそのままの姿勢で固まってしまった。俺は直立不動の姿勢のまま、ぴょんぴょん近づいてくるその女の子を目だけを動かして素早く観察した。年齢は十代に見える。セミロングの髪は黒く艶があり、小太りというよりはかなりがっちりとした体型で化粧っ気がなく、色白の肌は張りがあって肌理が細かくてきれいだ。とても風俗の女性には見えない。風紀に厳しい女子高にいくらでもいそうな、ブスだけど自分の体の手入れにしっかりお金と時間をかけているというタイプのようなのだ。やがて私のすぐ前にきた女の子は、左手を股間に当てたまま右手でパンティーをむんずと掴むと、下からジロリと私を見上げた。私は見てはいけないものをみたような気分がして、すぐに顔を横に向けたまま、さらに視線まで固まってしまった。ぴょんぴょん、どすんどすんという音が遠ざかって消えると、物の怪の魔力から解放されたような気分になり、すぐに首を元の位置にもどすと、もうその少女（？）の姿はどこにも見えなかった。すっかり度肝を抜かれた私は、ぐったりとしてもうコンビニに行く気もなくなり部屋の扉を開けた。

「ぎえー～～っ！」